様式　　平成２５年度　学校評価報告書　　学校名　四日市農芸高等学校

（１）学校経営の改革方針における今年度の重点取組についての評価結果

| 項目 | 行動計画の目標・評価方法 | 達成状況・評価結果 | 具体的取組に関する成果や課題 |
|---|---|---|---|
| 組織能力の向上 | １　中長期的な重点目標（組織能力３）「ＨＰの刷新、・・・」<br>(1)よりわかりやすいＨＰのあり方について議論し、刷新に向けて検討を進める。<br>２　中長期的な重点目標（組織能力４）「危機管理体制の整備・徹底・充実・・・」<br>(1)防災訓練を年２回実施する。<br>(2)第２回防災訓練にあわせて、三角巾による包帯法講習を地域住民に参加を呼びかけて実施する。<br>３　めざす学校像「３・・・環境教育を充実を図り、・・・」<br>(1)全教職員対象のＩＳＯ教育訓練（研修）を５月と３月の２回実施<br>(2)ISO14001外部審査に向けて全教職員が共通認識のうえ取り組む。<br>(3)生徒向けの啓発行事として、６月の環境週間、１０～１１月に環境月間を設定し、全校をあげて取り組む。<br>(4)農芸祭の模擬店にリユース食器を導入する方向で検討する。<br>(5)年間を通じて、ペットボトルキャップを回収するエコキャップ運動に取り組む。 | １　中長期的な重点目標（組織能力３）「ＨＰの刷新、・・・」<br>(1)刷新されたＨＰにて、校内外に最新の情報を発信できた。<br>２　中長期的な重点目標（組織能力４）「危機管理体制の整備･徹底･充実･･･」<br>(1)２回実施できた。<br>(2)三角巾包帯法講習には、地域住民約２０名に参加していただき実施した。<br>３　めざす学校像「３・・・環境教育を充実を図り、・・・」<br>(1)５月の１回のみ実施した。<br>(2)ISO14001外部審査に向けて、環境側面見直し調査を全教職員で取り組み、外部審査をクリアした。<br>(3)環境週間、環境月間ともに全校をあげて取り組むことができた。<br>(4)農芸祭非公開日にリユース食器を導入した。<br>(5)教職員の共通理解のもと、生徒たちの協力を得てエコキャップ運動に取り組むことができた。 | １　情報処理委員会での議論を重ねる中で、特に各コースの内容充実に取り組むことを方向付け、行動に移すことができた。<br>２　防災講話により、自分の命を自分で守ることの必要性を学ぶことができた。また、全校生徒に三角巾を貸与した。河原田地区市民センターを通じて講習への参加を呼びかけ、生活福祉コースの生徒たちが主体となって、三角巾包帯法の講習を実施した。生徒たちが実際の場面で講習の成果を生かすことができるか課題であるとともに、期待が持たれる。<br>３　教育現場における ISO14001 認証取得の意義を全教職員が再認識し、本校教育活動について自信をもって地域社会に発信していけることが確認できた。環境側面見直し調査を全教職員で取り組んだことで意識を高めることに繋がった。環境週間及び月間、リユース食器、エコキャップ運動の展開を通し、本校が独自に実施している全校生徒対象満足度調査で、環境教育の充実を感じている生徒の割合が昨年度同様、高い数値（９０%）であった。<br>４　その他、生徒対象満足度調査によると、「本校へ入学したことへの満足度」が昨年と同数値を維持できた。様々な組織力の向上による成果と考えられる。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 教科指導 | １　中長期的な重点目標（教科指導）<br>「専門的知識を高め技術を習得するため、専門教科の指導を強化する。」<br>⑴農業クラブの更なる活性化を図り、県大会最優秀賞４以上、東海大会最優秀賞２以上、全国大会優秀賞以上６つ以上の獲得を目標とする。<br>⑵家庭学科２・３年生の生徒は、各種コンクール・ショーに各自が１つ以上出品するよう指導する。<br>⑶「若き『匠』育成プロジェクト事業」「協創活動支援事業」等を活用し、専門教科の充実に努める。<br>２　中長期的な重点目標（農業及び家庭）<br>「キャリア教育、起業・ベンチャー教育の更なる充実を図る・・・」「スペシャリストの育成を図る・・・」<br>⑴農業学科では、地域から期待される農芸高校を目指し、地域開放的な取り組み、各種イベント、小中学校への出前授業等へ積極的に参加し、地域連携の強化を図る。<br>⑵家庭学科においても、地域連携の機会を増やし、なるべく多くの生徒がコースの特色を生かして地域との関わりを持つことで、専門性を深める。 | １　中長期的な重点目標（教科指導）<br>「専門的知識を高めるため、専門教科の指導を強化する。」<br>⑴農業クラブ全国大会優秀賞２、東海大会最優秀賞０、優秀賞２であった。また、全国産業教育フェアフラワーアレンジメントで優秀賞を獲得した。<br>⑵各コースの特性を活かして全員が応募できた。<br>⑶左記の各事業の指定を受け、充実した専門教育活動を展開することができた。<br><br>２　中長期的な重点目標（農業、家庭）<br>「キャリア教育、起業・ベンチャー教育の更なる充実を図る・・・」「スペシャリストの育成を図る・・・」<br>⑴農業学科における地域での農産物販売、みのりの丘マーケット等へ参加した生徒の満足度は、今年も１００％であった。<br>⑵家庭学科では、デイサービス、河原田地区セミナー、学童保育所との交流、高齢者との交流、地域女性会を始めとする住民との交流を行った。いずれも地域からの要望が高く、生徒も満足度も高い。 | １⑴農業クラブ各種競では、県大会及び東海大会の競技レベルが上がってきており、全国大会出場を果たすことができなかった。来年度から開催が決定している農業鑑定県大会を踏まえて、指導のあり方が課題である。<br>１⑵家庭学科では、日本和裁士会主催「きもの作品コンクール」で、２名が優秀賞を受賞する成果を収めた。また、産業教育に関する作文で中央会の優秀作文に選ばれるなど、多くの成果が得られた。<br>１⑶「匠」事業では、企業との連携により、専門技術者による授業を公開実施するとともに、３名の生徒が技能五輪出場を果たした。「協創活動」では、みのりの丘マーケットを通して地域住民と交流し、様々な意見をいただきながらマコモを食材とした商品「マコモダケカレー」を開発した。<br>２　地域連携に関わった生徒の満足度は非常に高い。今後の課題として、農業学科の参加者数を増やしていく工夫が必要と思われる。地域連携は、地域からの期待の声や継続を求める声が多く、生徒も満足感を感じており、今後も可能な限り継続したい。地域連携が単に「楽しい」というイベント的な催しではなく、生徒が地域の人々を指導したり、コミュニケーションを図る中で、専門性を深め、自信に繋げることができる利点があり、校内の学習だけでは得ることのできない効果が期待できるものと思われる。家庭学科は、長年続けていた地域の独居老人へのデイサービスが地域の事情により今年度末で終了したことを受けて、新たな地域連携活動を模索することが課題である。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 生徒指導 | １　中長期的な重点目標（生徒指導２）<br>「秩序ある学校の雰囲気を大切にし、挨拶と人を思いやる気持ちを持つ生活態度の育成に努める。」<br>(1)全生徒・教職員の 80%以上が挨拶が出来ると感じる。<br>(2)全生徒・教職員の 80%以上が状況に応じた言葉遣いができていると感じる。<br>(3)全教員が生徒に対しての声掛けが出来ていると感じる。<br>(4)担任と生徒指導部の連携強化、問題行動の抑止<br>(5)学校行事を良かったと感じる生徒が 85%以上を目指す。<br>(6)問題行動の抑止 | １　中長期的な重点目標の生徒指導<br>「秩序ある学校の雰囲気を大切にし、挨拶と人を思いやる気持ちを持つ生活態度の育成に努める。」<br>(1)生徒 92%達成、教職員 88%達成<br>(2)生徒 82%達成、教職員 56%未達成<br>(3)98%達成（回答率 83%）<br>(4) 担任と生徒指導部などで生徒の情報を共有することで多面的な指導ができている。<br>(5)90%　達成<br>昨年の 86%に比較して４ポイント上昇<br>(6)特別指導は、５件５名（昨年８件１７名）で、昨年より減少しており、抑止の姿勢が伝わっていると思われる。 | １(1)目標は達成したが、自ら進んで気持ちよく挨拶できない生徒の存在も感じる。<br>１(2)言葉遣いが不十分で、友達言葉でないとうち解けて話せない生徒が多い。教員として、時にはそうした対応を許さない姿勢で生徒と関わることも必要である。<br>１(3)声掛けから始まる生徒と教員の交流が本校の強みである。大切な学校文化として継続していく必要がある。<br>１(4)何かないと生徒指導室へ足を運ばない教員もおり、生徒指導部側からのアプローチを引き続き継続していく必要がある。<br>１(5)各部署の取り組みにより、生徒は充実していると感じているが、「誰かが楽しませてくれる」という受け身意識の生徒の存在も感じる。<br>１(6) 登下校指導や週１回の生活点検などで生徒に関わる機会をつくることが問題行動抑止にも繋がっていると感じる。<br>その他<br>生徒対象の満足度調査によると、「生徒指導の徹底」「エチケット・マナー指導の充実」に対する満足度が昨年比でそれぞれ１及び４ポイント上昇した。 |
| | ２　中長期的な重点目標（生徒指導５）<br>教育相談及び特別支援教育の充実を図る。<br>(1)委員会を主体に推進し、機能を充実させるとともに、教育相談担当者と担任との連携を図る。 | ２　中長期的な重点目標（生徒指導５）<br>教育相談及び特別支援教育の充実を図る。<br>(1)教育相談・特別支援委員会を設置するとともに、主務者を指名し、委員会の定期開催による情報交換や研修を充実させた。状況に応じて教育相談支援員の活用を図った。 | ２　教育相談支援員の活用により、専門的な対応が可能になった。悩みを抱える生徒も多く、教育相談支援員等の業務時間数増加が望まれる。 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 進路指導 | １　中長期的な重点目標（進路指導１）<br>「進路に対する意識を高め、一人ひとりの進路実現に向けた指導に取り組む。」<br>(1) １学年は勤労観と自己理解を深めるため、進路講話を３回以上実施する。<br>(2) ２学年は、総合学習の時間を通して、自己の進路実現に向け自主的な行動がとれる能力を養い、全員の生徒が就職・進学の意思決定を目指す。<br>(3) ３学年は、進路決定に向けて学年と協力し、進路未決定者０を目指す。<br>(4) ３学年団、学科と連携し、過去の実績をもとに 100 社以上の事業所を訪問する。<br>生徒の企業見学に積極的に取り組み、生徒が企業を理解し応募決定ができるよう努力する。<br>(5) 学年・学科との連携を強化し、四大進学希望者への早期指導に努める。また、進学課外を体系的に実施する。<br>(6) ２学年の全ての生徒を対象にインターンシップを実施し、進路を考える上での職場体験を実施する。また、職業選択能力や働くことに対する望ましい見方・考え方を育てる。 | １　中長期的な重点目標（進路指導１）<br>「進路に対する意識を高め、一人ひとりの進路実現に向けた指導に取り組む。」<br>(1) １学年は、1 学期 1 回、2 学期 1 回、３学期２回の進路講話を実施（達成）<br>(2) ２学年の進路総合学習を実施、生徒全員が進路希望の意思決定ができた。<br>(3) ３年生進路未決定者３名<br>(4) 企業訪問:196 社<br>（達成、昨年比計 15 社増）<br>生徒の企業見学延べ数:401 人<br>(5) 四大進学１５名（国公立１名、専門分野進学者５名）<br>進学課外を３年、２年対象に実施<br>(6) １月末から２月初にかけて４日程度実施した。実施にあたっては、受け入れ先の確保、企業訪問、生徒との打合せなど全教職員の理解が得られた。受け入れ先として、最終的におよそ 90 箇所でお世話になることができた。また、インターンシップ報告会を実施し、生徒間で状況を共有するとともに、１学年の生徒にも参加させることで、次年度に繋げるよう配慮した。 | (1) １学年では、３学期に卒業生による進路講話を行った。現時点での講話は非常に有効であった。<br>(2) ２学年の総合学習の中に、インターンシップを実施した。面談により、進路について前向きに考える生徒が増えた結果、今後の進路について悩んでいる生徒も多い。<br>(3) 進路未決定者への支援・指導を粘り強く継続していく必要がある。就職支援相談員やジョブサポーターの支援効果が大きく、今後も継続して要請したい。<br>１・２学年でも２回進路希望調査を行ったことにより、進学希望者を早期に把握することができた。<br>(4) 継続した企業訪問により、企業との連携を深めていきたい。<br>(5) 進学希望者対象の実力判定模試結果の活用が課題である。また、専門性を生かした進学希望者をどのように指導していくか、学年、学科・コース、教科との連携を密にして推進する必要がある。<br>(6) インターンシップ終了後、生徒にアンケートを実施したところ、「会社や仕事のことがわかった、少しわかった」と答えた生徒が 98.7%、「今後の進路を考えるうえで役に立った、少し役に立った」と答えた生徒が 98.7%に達し、成果を収めたものと思われる。受入企業側もインターンシップの意義について、93.3%が「有意義である」としている。一方、教職員は、概ね肯定しながらも、時期の問題、業務への負担感など様々な意見がある。今後意見集約しながら定着に向け改善策を講じていく必要がある。 |

（２）組織の状態の評価結果

| アセスメントから明らかになった状況 | |
|---|---|
| 強み | １、本校は、2002 年に ISO14001 を認証取得して以来、環境教育を充実させてきた。本年度は、昨年度の指摘を受けて、最初に認証取得して以来、全面的に環境側面見直し調査を全教職員で取り組んだ。そうした取り組みを実践して外部監査を受けたことで、環境マネジメントシステムに関する認識を全職員が一層深めることができた。また、校内研修により教育現場における環境マネジメントシステムの意義を確認し、各教員が環境教育を授業実践することで、本校組織の一員であるという意識を高め、目指す学校像実現に向けて心を一つにすることができた。また、全教職員の理解を得て、リユース食器の導入、環境月間（環境に関する授業を含む）、エコキャップ運動など、生徒対象の環境教育を実施し、意識啓発に努めることができた。<br>２、平成２３年度に実施された河原田地区合同避難訓練を受けて、教職員間に防災意識が高まり、本年度も防災訓練を２回実施した。特に２回目は、全校生徒に三角巾を貸与し、必要なときに誰でも活用できるよう、生活福祉コースの生徒が中心になって、全校生徒に使用法の講習を実施した。その際、河原田地区市民センターを通じて河原田地区住民に参加を呼びかけ、地域住民も参加して実施することができ、地域の中にあって、高校が果たす役割の一端を考える機会にできた。<br>３、インターンシップの実施や積極的な企業訪問による求人活動などが功を奏して、就職希望生徒の全員が卒業までに内定できた。また、本年度も国立大学へ合格者を得た。これらは、全教職員が関わっての面接指導、普通教科と専門教科が一体となった課外指導の成果である。そのうち、進学指導においては、２年前のカリキュラム委員会で議論した進学課外のあり方に関する方向付けが活かされたものと考える。<br>４、基本的な生活習慣（挨拶、服装、身だしなみ等）に関する指導は、全教職員の共通理解による指導が確立されている。生徒の満足度調査において、生活指導の徹底に対する満足度が、さらに上昇している。<br>５、クラブ活動が年々活発になり、たくさんの生徒が積極的に取り組み、その成果も多くのクラブでみられるようになってきた。 |
| 弱み | １、環境マネジメントシステム（ISO14001）を維持していくための経費が学校運営費で賄っているのが現状である。<br>２、全校的なインターンシップを導入して２年目になるが、受け入れ先の開拓などに課題を残す。<br>３、専門教育において、教職員の専門性を向上させる必要があるが、教職員の育成体制や研修体制が必ずしも十分とは言えない状況がある。<br>４、最先端の専門教育（農業、家庭科）を実践するためには施設が不足する。特に、家庭学科における生活福祉コースの施設設備は、生徒たちの期待に応えられるような福祉介護の教育を展開するための設備が不足しており、改善の必要がある。<br>５、クラブ活動の伝統を守り、育てていくための人的配置に課題がある。<br>６、教職員の勤務時間縮減について、会議の設定など配慮してはいるものの、抜本的な取り組みには至らなかった。 |

（３）学校関係者評価委員会の実施状況

| 学校関係者評価委員会の実施内容等 | |
|---|---|
| ＜実施回数＞　　１回 | |
| 実施内容 | ○委員会としては、３月に１回開催<br>○「農芸祭」「卒業式」に来賓として来校し、教育活動の様子を視察していただく。<br>○各評価委員の専門分野に応じて相談を持ちかけ、支援をお願いしている。例えば、様々な地域連携活動の実施にあたり、市民センター館長や自治会長に相談することで、円滑に推進するとともに、評価委員として参加していただく。 |

（４）学校関係者による評価結果

| 学校関係者評価から明らかになった改善課題 | |
|---|---|
| 関係者評価 | ○県の様々な事業を活用され、専門教育の充実に取り組まれている。また、地域連携の取組は農業学科、家庭学科とも積極的に行われている。地域連携を学習活動の向上に活用していくことは、学校教育にとどまらず、地域の活性化という視点でも有効な手法である。今後、地域の実情等も踏まえ、新たな展開を模索していただきたい。<br>○キャリア教育の一つとして、２学年の全生徒を対象にインターンシップを実施されていることは意義がある。生徒の要望に応えていくために、受け入れ先を拡大させていく必要がある。地元で活躍している同窓会メンバーへの働きかけも一つの方法である。 |

（５）組織力向上のための取組（改善策）

| 次　年　度　に　向　け　た　取　組 |
|---|
| １、北勢地区における農業と家庭科の唯一の専門高校として本校の存在意義と農業教育・家庭科教育のあり方について深く議論し、教職員の共通認識を深めるとともに、学校づくりの新たな戦略を確立する。<br>２、最先端の魅力ある専門教育を実践させ、生徒の学力を向上させるために、授業研究を充実させるとともに、意欲的な教員に対して研修機会を増やし、教員の技術力、指導力向上に努める。また、新鶏舎の建築に伴い、教育的な活用について研究を深める。<br>３、環境教育については、過去の成果を踏まえ、教職員組織の中で引き続き共有しながら充実発展を図る<br>４、計画的なキャリア教育を推進し、進路保障を一層充実させる。特に、インターンシップについては、校内委員会を中心に本年度の反省点や課題について議論を深め、さらに充実した運営ができるよう検討を進めるとともに、全教職員の共通理解に向けて努力し、引き続き実施する。また、進学指導としての課外授業を充実させることと、求人確保のための企業開拓を引き続き推進する。<br>５、教育相談及び特別支援教育について、教職員の共通理解を深め、推進体制を充実させる。<br>６、本校の教育を中学校やその保護者に充分理解してもらうための学校説明会や高校生活入門講座を充実させるとともに、積極的に中学校訪問し志願者の確保に努める。<br>７、本校恒例の「体育祭」「農芸祭」「文化部合同発表会」などの行事を充実させるとともに、保護者の参加を積極的に働きかける。<br>８、ＨＰの日々の更新に努めるとともに、研究紀要「額の汗」（本校の教育実践報告）の発刊等により、情報発信の充実を図る。また、報道機関への情報提供、地域連携、中学校連携等をさらに推進する。<br>９、学校関係者評価委員による意見の活用を図る。<br>10、授業公開は、保護者にとって生徒たちの学校での様子を見る良い機会となっている。本校の教育活動を理解してもらうために、ＰＴＡ役員とも引き続き協議を重ねる必要がある。<br>11、生徒・保護者の満足度、教職員の満足度がより高いものになるよう実態を把握し、培ってきた強みを伸ばし、弱みについて対話を中心にして改善を図る。 |